

東京にナポリターノ大統領がいる間にはスカラ座の公演「ドン・カルロ」の上演がございますし、西欧美術館ではローマ帝国の展示会が行われます。このオープニングには大臣も出席なさります。我々両国とも国際的な経済危機に対応していかなければなりません。しかし、トンネルの奥に光が見えてきたように思えます。日本はこの不況の中から出てまいりました。GDPなどの最近の数字によりますと、まだ大きな回復とは言えませんが、少しずつ回復の兆しが見えてきております。

イタリアに関してしては3つのデータをご紹介します。7月の数字ですが、工業生産が1%、ヨーロッパ圏に対する輸出が5%増、また国内消費も0.8%増加しているという数字が出ております。こうしたことから2009年の下半期におきましては、徐々に、不況し、ゆっくりではあるけれども回復していくと言えます。OECDの予想によりますとイタリアとフランスはもっともこの経済回復を引っ張っていく力があると評価されています。まず日本とイタリアの関係でお話したいと思います。ザッパ会長からもお話がありましたように、両国の貿易関係は安定してはいますが、少し停滞状況にあります。我々両国ともとても大きなポテンシャルをもっております。他のパートナーに対しては着々とその力を伸ばしておりますが、我々の関係は少し停滞気味です。イタリアからの輸出の3分の1はファッションです。また、薬品関係が11%を占めております。イタリアは特に日本からは自動車・機械機器を輸入しております。日本に対するイタリアの輸出は毎年約40億ドル程度で推移しております。今年も上半期日本に対する輸出は13.7%減少いたしましたけれど、他の世界のパートナーは24%減少しておりますので、それに比べたら小さくなっております。これはポジティブな数字といえます。1999年から2008年の数字を見てみますと、日本に対するイタリアの輸出は21.4%増加しております。しかし我々はもっと力があるはずで、イタリアがその他の国との輸出を伸ばした数字から考えるともっと伸ばせるのではないかと思うのです。輸入というのも近年停滞しております。2009年の上半期は20.9%の落ち込みを示しております。1998年から2008年を見ますとだいたい50億前後動いております。ここで決して満足をしてはいけないと思います。どうしてこういう状況が続いているのか考えてみます。どうして2国間の持つポテンシャルを十分に発揮できないのでしょうか。去年イタリアは経済不況の前で世界貿易の3.6%という世界7番目のFDIにおいても世界第6番位の地位を受けるといったレコードをあげております。

今回のビジネスグループではこうした状況にどのように打破していくかという新しいヒントがあるのではないかと思います。まず、私は様々な貿易障壁に対して働きかける必要があると思います。関税障壁もございませぬ。特に農業部門、これは日本が戦略的と考えるお米のような製品に対する関税です。あるいはイタリアが得意とする企画製品や靴に対する関税もあります。また非関税障壁もあります。これは植物園製であるとか食品添加物の問題です。政府調達分野におきましても、ほんの一部しか海外企業に開かれておりませぬ。

そこで世界貿易の更なる自由化に向けて、ドーハラウンドの再開が重要だと思っております。

今年イタリアが G8 の議長国でございますが、その一つの目的として 2010 年にドーハラウンドの開催を目指しております。ラクイラにおけるサミットは新興国にも広げて開催されました。このようにして新しい地球の経済的繁栄を実現したいと考えたわけです。そうした取り組みから新しい成果も生まれてきております。9 月の始めに行いましたニューデリーの会合におきまして、それがジュネーブでシニアネゴシエーションのレベルの会話につながっていきます。副大臣の石毛さんが今回そのフォーラムに参加されております。また日本政府に関しましてはヨーロッパ連合との交渉も始まります。日本と EU の場合はラテラルな協定を目指すもので、韓国に対して行われたものと似ております。本当に重要なのは成果です。私たちにとっても重要なのはこうした障害を日本に対する日本市場への障壁が徐々に払拭されていくことを望んでおります。日本の方々もイタリアの製品が簡単に日本に入ってくればきっと喜んでいただけたと思います。

また FDI についても少しお話したいと思っております。まだ満足のいく状況ではございません。イタリアでは 290 以上の企業が活動し、3 万人に就業を提供し、およそ 126 億ユーロの年商をあげております。機械部門、エレクトロニクス、科学といった部門です。日本の投資は 2008 年に比べて 4 倍の 180 億円になっておりますが、しかしパーセンテージ的に言いますと、0.14%とまだ非常に低い数字になっております。日本が世界に対して行っている FDI の 0.14%となっておりますが、もちろんこれは私たちの責任です。日本がヨーロッパ、アメリカ、北米で 80 年始めから行ってきたような投資に優遇策を十分にそろえることができなかつたからです。ヨーロッパと日本の自動車メーカーとのコーペレーションというものがすでに行われております。イタリアでも様々な取り組みが行われてきましたが、様々な理由によってうまくいくことができませんでした。私は「アルナ」という車を非常に愛用していたことがございます。我々イタリア人はその時まで閉鎖的だったと思っております。そこでこの失われた時間を取り戻したいと思っております。日本からの直接投資を促進するような政策を取っていきたいと思っております。現在日本には 200 のイタリア企業が活動しております。ファッションや食事だけではなく、様々な分野に我々の活動を拡げていきたいと思っております。例えばフィンメカニカは日本でも昔から大きな仕事をしておりますが、日本に対して非常に大きな関心を持っております。それはビジネスグループの会長の一人がザッパ氏であることから良く分かります。ファッションや食事だけではなく、先進テクノロジーにおいても分野を拡げていきたいと思っております。先進テクノロジーは我々の生産工業の特長でもあるからです。非常に多様な製品を作っております。そこで私たちは非常にしっかりした産業構成を持っておりまして、これは我々が危機に対応した力からもお分かりになると思います。また、もう一つ我々が非常に興味を持っているのが、環境問題、再生可能エネルギーの分野です。イタリア、日本両国企業は様々なテクノロジーを持っております。そこで第三国に対するコーペレーションというものの、そしてヨーロッパ地中海地域に対しても行っております。また原子力エネルギーにつきましては、ローマでの G8 の

際に両国大臣によって協定が承認されました。ちょうど私たちのビジネスグループのエネルギー分科会がローマで集まっていたときでした。イタリアはここでも地中海、中東に向けてのプラットフォームになることが出来るわけです。また、ラテンアメリカや北アフリカにとってもプラットフォームになるべきです。そして日本はイタリアにとってのアジアに向けての糸口となることが出来るわけです。この IJBG の役割はこうした状況の中でさらに重要なものとなっているわけです。

経済危機は一つの経済改革をもたらしたと言えることが出来ます。消費の形が変わり、製造の形が変わりました。大企業が参加しているこのフォーラムはこういった状況を認識してこの変化プロセスに対応できるものだと思います。この IJBG によった機会によってこの二国間でどのような協調関係を構築できるか、これ以降発展させることが出来るか、モニタリングすることが出来ます。また IJBG はそれぞれの国に関心を持つ企業が様々なパートナーを巻き込んでいくという非常に素晴らしいフォーラムを取っております。去年イタリアで行われました第 20 回の会合で新しいセクターに対してもこの IJBG の活動を広げていくことが話し合われました。ということで、先程あったように 4 つの分科会などが出来ましたし、またバイオテクノロジー、ロボット、ナノテクノロジー、再生可能エネルギーあるいは災害予防、文化遺産の保存テクノロジーなどの分野についても活動を広げたいと思います。4 つの分科会が様々な活動を行いまして、我々のこれからの仕事に繋げていってくれるものと思います。我々はこの停滞から抜け出す施策を見つけ出すことが重要だと認識しております。昔の G8 はだいたい北半球にある国でございました。イタリアだけがその例外です。イタリアは地中海に突き出た国であるわけです。新しい平衡関係は南の方に移っております。ブラジル、南アフリカ、メキシコ、中国、インドが大きな力を持つようになってきています。こうした中で私たちイタリアの企業もつ役割、可能性は非常に大きなものと思います。このイタリアと日本における文化の関係というのも経済関係を反映するものだと申し上げてよいと思います。今回は早稲田大学の白井総長、また日本の学会からの出席者もいらっしゃると思っております。早稲田についてはご紹介の必要もないかと思いますが、日本の名門校の一つでありまして、世界大戦後 6 名もの総理大臣を輩出しております。イタリアにとって非常になじみのある大学で、イタリアのヴェニスインターナショナルユニバーシティに参加している唯一の日本の大学です。日本に対するヴェネツィアに関心もこういったところからも非常に大きくあります。またカーペツァロには江戸時代の日本美術のコレクションがございます。全部で 3 万点以上ありますが、刀や脇差、磁器などがあります。これはゴルゴン家のエンリコ皇太子が 19 世紀の終わりに収集したもので、カネルグランデ運河沿いのカーペツァロに収容されています。

そして最後にこの文化交流に関しまして、10 年前に創設されました伊日財団の功績をお話したいと思います。2001 年、2002 年の日本におけるイタリア、また 2005 年の愛知万博

においても大きな役割を果たしました。愛知万博ではマツツァ・デルバーロから「おどる先路像」が展示されましたけれども、このマルサルデルバーロという都市はイタリアの工業集積地という大きな特色のある都市です。愛知万博におきまして、イタリアパビリオンはもっとも見学者が多く、350万人の方が訪れましたが、これからも日本の方々のイタリアに対する関心と愛情が見て取れます。ヴァッターニ理事長は2007年3月から外務省によりこの伊日財団の理事長として活動しております。イタリアと日本の様々な形で経済と文化は決して分かれるものではありません。非常に大きな柱になっているわけです。我々の関係はこの経済と文化の二本柱で行われました。日本の方々はイタリアの文化を愛してくださっています。そしてイタリアの文化は我々の製品の中に反映されているわけです。そしてそれが我々の住む世界を反映しているわけです。イタリア大統領が今回こちらに参りますし、様々な展示会のオープニングに参加するという形で日本の皆様の友情に応えようとしております。どうもありがとうございました。